

兄弟で地域と繋がった新しい高原野菜栽培を実践したい

長野県佐久平総合技術高等学校 食料マネジメント科 3年 小松 大晴

「兄ちゃん、俺が継ぐから、やらなくていいよ」、この言葉をきっかけに、私我が家の農業を考えるようになりました。

私の家は八ヶ岳連峰最北端蓼科山のふもとの長者原という地域で年間、白菜3万ケース、キャベツ7万ケース、リーフレタス3千ケースを出荷している専業農家です。曾祖父が始めた野菜栽培ですが、現在、父、母、祖父、祖母、アルバイト、外国人研修生を受け入れ、栽培しています。

私は幼いときから、家の農業を手伝ってきましたが、野菜栽培の過酷さは想像を絶するほどです。夏場の約4ヶ月間は毎日朝4時から野菜を収穫し、午前中だけ一日千ケース以上の出荷をします。午後は苗の植え付けを行い、その後消毒や水くれなどの作業があり、夜9時頃までかかることもあります。足腰は痛くなり、寝る時間もないのが普通です。

大変だけどなんとなく長男の自分が継ぐ者だと思っていた私は弟の言葉に驚き「家を継ぐのはそんなに簡単じゃねえよ」と言い返すと「それは兄ちゃんだって同じじゃねえか」と言われ、喧嘩に発展しました。

それを見ていた父親から「お前ら二人でやればいい。野菜農家の大変さも、やりがいもお前たちは分かっていると思う、しかし、これからは自分の家だけのことを考えていたのではダメだ。地域の関わりや仲間作りが大切である。そこをよく考えてみる。」と言われました。

「地域の関わりや仲間づくりが大切？」その言葉に疑問を持った私でしたが、父が青年部で20名の仲間と活動していることに気が付きました。青年部では共通の畑があり、新しい品種や肥料の栽培試験を行い、そのたび仲間との意見交換をしています。青年部の研究が始まったきっかけは父親達の苦い経験からでした。それは十数年前黒腐れ病で我が家含め長者原全域のキャベツが全滅してしまっただけです。そこで仲間と協力して対策試験を始めました。その父親の姿を見て私は自分の家だけではなく地域全体で問題解決に取り組まなければいけないと考えるようになりました。

そこで私は、長者原地域の問題を考え、改善できることはないか考えました。

我が家や地域の問題点の一つ目は、畑が山ぎわにあるものが多く、そのため山の木のクズや葉が野菜に入ってしまうことがあります。少しでも、木のクズや葉が入ってしまうと商品として扱うことができなくなってしまいます。しかし、山は他人の所有物であり、管理をお願いすることはできません。

二つ目は山に生息しているシカなどが畑の野菜を食い荒らすことです。こういった鳥獣被害は電子柵などを用いて工夫をしていますが、そのための費用はかなりの金額になっています。

そして最も大きな問題は人手不足です。我が家を含む高原野菜農家の多くは、家族だけでは経営を存続することはできません。特に若者の農業に対してのイメージは良くない上に、日本では少子高齢化が問題となり、日本人の労働者は見込めません。そこで外国人に頼るしかないのですが、言葉や文化の違いなど、外国人とのコミュニケーション問題は大きな課題です。長者原地域でも毎年、日本に馴染めず、相談する仲間もいないため、すぐ嫌になり、帰国してしまう外国人労働者が何人もいます。

この問題を解決するには兄弟喧嘩をしている場合ではないと気づいた私達はある夢を描いています。それは、将来弟と一緒に、我が家の野菜栽培をしながら畑の近くの里山を購入して民宿を経営したいと考えています。標高千mの高原地帯で、蓼科山の麓のきれいな空気や水がある長者原で、野菜の栽培や収穫体験もでき、地元の食材を食べてもらい、また、自然体験ができる施設を作りたいと考えています。人が山を利用し、整備すれば、畑に木のクズや葉が入ってしまうことも無くなり、シカなどの食害もなくなります。さらにその施設を外国人労働者の寄り所にしたいと考えています。そして将来、各農家で宿泊させている外国人労働者を一カ所に宿泊させる施設にすることも考えています。私はこの夢の実現のため、高校卒業後は農学部国際系の大学に進学し、留学などの体験を通して語学の習得や海外の野菜作りや経営を勉強したいと考えています。

その話を青年部の方にしたところ「戻ってきた時に一緒に活動するのが楽しみだ。」と励ましの言葉をいただきました。

私は将来弟とともに、我が家の野菜作りをしながら、民宿を経営することで、長者原地域から地域と繋がった新しい高原野菜栽培を実践していきます。